

情 報

野村研究室プレゼンテーション抄録

歯科技工士学科教員から立ち上げた研究室プレゼンテーションは、3年目を迎えて計39テーマの抄録を紀要に掲載することができた。平成18年度に開催した専攻科生体技工専攻生の症例報告は習得した知識、歯科技工の創意工夫、患者の要望や満足度などを総合的にまとめた内容であり、臨床技工の資質向上に貢献するものであった。また、歯科技工室からの症例報告や、学外の研究者が提言した歯科補綴の将来予測も今後の臨床技工に大いに役立つテーマであった。

(文責 野村 章子 歯科技工士学科)

第31回：平成18年2月6日

シリコン模型から使用義歯の情報を効果的に取り入れた全部床義歯症例

歯科技工士学科専攻科 生体技工専攻7回生
五十嵐 渉

「歯科技工士学科専攻科生体技工専攻 症例報告」を参照のこと

第32回：平成18年2月6日

審美性を考慮した局部床義歯症例

歯科技工士学科専攻科 生体技工専攻6回生
松本 崇臣

患者は60歳代男性で、上顎右側中切歯の欠損による発音障害を訴えていた。そこで、発音の改善と審美性を考慮した義歯の設計に際して、欠損部位の両側隣在歯隣接面のアンダーカット域内に設置できるような0.6mmφの細いCo-Cr合金線を使用した隣接面鉤を採用した。

本症例を通して、サベイングと撤去方向の決定が義歯の維持安定に大いに関与することや、床形態の工夫が発音や装着感を向上させることが理解できた。また、精密な技工作業に使用する双眼実体顕微鏡が細いCo-Cr合金線のクラスプベンディングにも有効であることと、ステップごとに細かいクラスプアームの適合性を確認することの大切さを実感した。

第33回：平成18年5月8日

義歯治療を簡便にする歯科技工士からのアプローチ

歯科技工士学科専攻科 生体技工専攻7回生
山本 茜

「歯科技工士学科専攻科生体技工専攻 症例報告」を参照のこと

第34回：平成18年5月8日

実験的に付与したリングライズド・オクルージョンの食物動態について

歯科技工士学科
丸山 満

リングライズド・オクルージョンの食物動態を明らかにするために、in vivoで可撤性橋義歯の咬合面形態を変化させ、ピーナッツ粉碎粒子の食物動態について測定、分析した。その結果、頬側咬頭内斜面の間隙量の増加とともに、より粉碎度の高い粒子が頬側に貯留した。その他の粒子は舌側に移送されたが貯留率、粉碎度は低下した。本研究から、頬側咬頭内斜面に咬合接触があることは望ましいが、リングライズド・オクルージョンの咬合様式を付与する際に、食物移送能力の点から頬側咬頭間隙量は0.5mmが望ましいということが示唆された。

第35回：平成18年6月12日

部分床義歯基礎実習の効果的な指導法

歯科技工士学科
佐々木 聡

従来の部分床義歯基礎実習の指導方法では、実習時間内に行う説明の頻度が多いため、作業時間が少なくなる、全体の流れが解らないなどの問題点があった。そこで、平成16年度より本実習の教育効果を向上するために、各課題についてステップ模型と資料の改善を試みてきた。さらに、平成17年度は課題毎にスライドを用いて全体の流れや注意点を説明する方法も取り入れた結果、全体の流れが理解しやすい、説明のメモを取りやすいなどの意見が学生から得られた。その一方でデモンストレーションを導入した方がより解りやすいとの意見もあったので、動画機能を含むスライドを新たに作成した。今回はその内容と教育的効果について紹介した。